

## 万延元年の地球一周 ——ある遣米使節の日記——

「アメリカに行ってきたほしい」職場で突然呼び出され、居並ぶお歴々にそんな命令を受けたとしたら、あなたは一体どんな気持ちになるだろうか。

これは幕末、難破して漂流でもしない限り日本人が誰も辿り着いたことの無い土地アメリカへ、条約を取り交わす使節の副使に突然任命された男、村垣範正の日記である。

この本には、図書館の入り口からそう遠くない書架で出会った。決して奥まった場所ではないのだが、本同士が陰をつくる薄暗い「何かが隠れていそうな」場所だった。ノンフィクションにはとんと縁の無い読書遍歴だったが、冒頭に記したように、著者の村上淡路守範正が突然アメリカ行きを言い渡されるという最初の 1 ページで完全に惹き込まれてしまった。

事の始まりは万延元年(1860 年)。当時外国奉行を任されていた村垣範正は、同僚の新見正興を正使とした遣米使節に副使として派遣されることになる。アメリカの軍艦ポーハタン号に乗り強敵の船酔いと戦いつつ、ハワイを経由し一行はパナマへ向かう。パナマを蒸気機関車で横断した後は、いよいよ大西洋へと繰り出しワシントンへ向かう。日本とは全く異なる文化に驚きつつもきちんと職務をこなし一行は足早にアメリカを去る。そしてアフリカの喜望峰や東南アジアを通り約 9 ヶ月の旅程を終え、日本へ帰還する。これがこの日記の一部始終だ。

この日記の特に面白い所は、生真面目な範正が書く生真面目な文章の中に垣間見える風変わりな言動だ。蒸気機関車を見た時には、車輪の構造や客車のサイズまで詳細に書くほど几帳面な彼だが、いかなる出来事に遭遇した際も淡々とした字面でそれを語っていく。そのギャップが笑えるのだ。

例えば、ホテルの屋上からワシントンを眺めた時は『家作はれんが石の赤のままのものが多くて、風景は優雅の趣きなど少しもない。わが都下の回禄(火事)の後を見るようで、ワシントン(華盛頓)の名もつぎだらけである』と記した。

また、一行がアメリカで議会を見学した際の様子は、こう記している。『およそ四、五十人もならんで、そのうちの一人が立って大音声にののしり、手まねなどして狂人のごとし。(中略) 大音にののしるさま、副大統領の高いところにいるありさまなどは、わが日本橋の魚市場のようすによく似ている』範正は、よもやこの「火事の後」や「魚市場」が江戸を塗り替えていくとは思わなかっただろう。

しかし私は、この日記をただ単に文化間の食い違いを楽しむだけのものではないと考えている。相手の文化は実際に現地に行って触れてみなければとても理解出来るものではない、そんな教訓が垣間見えるのだ。偏見や独断など、多少見当違いな分析もあるが、それさえ、アメリカという地に立たねば浮き彫りにならなかったのだ。自国に引き籠ってばかりで判然としなかった日本人の外国に対する考え方がよく分かる資料にもなっている。

ここ数年、テレビや書籍では日本文化の素晴らしさを改めて捉えるものが増えている印象がある。果たしてこの傾向は良いものなのだろうか。日本人自身が捉えなおした日本文化を安易に受容してしまって良いのだろうか。私はそうは思わない。実際に日本の外に出て行ってこそ、日本の事がよく理解出来る筈だ。現に範正も日本へ帰って来た際に、日本の食事の美味しさや風景の美しさが出発前より遥かに強く感じたと言っている。是非私たちも、範正の経験を元に、自国・他国への理解を深めていきたいものである。

最後に、範正が日記の終わりに残した一句を引用しよう。

『異国の 灘のりこへて 五百重波 かかる恵みを 代々にあふがん』